

在宅医療時代担い手に

京都薬科大生・院生 医師と現場実習

京都薬科大が学生たちに京都市内の診療所で在宅チーム医療の現場を経験させる実習を行っている。国民の3人に1人が65歳以上となる2025年には在宅医療が主となることを見据えた取り組みで、今年度は初めて、がん薬物療法を研究する大学院生が参加した。医師や看護師ら他の職種と協力し、在宅医療を受ける患者の声を聞いてニーズを探ることで、学部生には地域における薬剤師の役割を認識させ、院生にも患者の役に立つ研究を意識させる狙いだ。

変わりゆく薬剤師の役割

京都薬科大は16年度から5年生を対象に在宅チーム医療の実習を導入。今年度は14人が参加し、初めて院生も加わった。博士課程1年の友金真光さん(29)は今年1月から2カ月間、京都市を中心に訪問診療を行っている渡辺西賀茂診療所(同市北区)でチーム医療の現場を体験した。2月下旬の午後、友金さんは医療品が積まれた専用車で、同診療所副所長の小原章史医師と共に男性患者宅を訪問。間質性肺炎の患者は前夜に体調が急変し、友金さんも駆け付けた。友金さんは



在宅チーム医療の実習で小原章史医師(右)と共に患者の話に耳を傾ける友金真光さん(左)
――京都市北区で

患者の様子や薬の量をチェックし、患者夫婦の話に耳を傾けた。この日は3軒を回り、最後の訪問先は糖尿病の合併症があるがん患者。低血糖に備え薬局でもらえるブドウ糖について説明した。診療所に戻った後は、スタッフや大学の教員らとその日の出来事や懸念事項を話し合った。がん治療を研究する友金さんは「実際に薬を使う患者さんの生の声を直接聞ける貴重な体験。薬の開発に携わる際に、その薬が患者さんにとって本当に生産的かどうかを判断する基準になる」と意義を語り、小原医師は「スタッフも刺激を受け、薬剤師が同行することで違う視点が得られる」と語る。薬剤師の役割は▽調剤▽処方薬の適切な服用の確認▽服用できない場合に患者の生活スタイルをふまえ、患者本人や家族と協力して原因や解決法を探る▽処方薬の低減や変更を医師に提言――などがある。薬局や病院でも同様だが、在宅医療では患者との関わりがより深くなる。近年は患者個人に合わせた「オーダーメイド医療」や、「がん免疫療法」など複雑多岐な治療が増え、在宅医療現場でも高度な薬剤の知識が必要になる。AI(人工知能)などの発達により、薬剤師の役割が、調剤から変わりつつあることも在宅医療への積極参加の追い風になっている。

京都薬科大は「他職種と連携しながら一人の患者さんを支えていくことの本质を現場で学び、あらゆる場所で生かしてほしい」とし、参加した学生の声を教育にも生かして今後も継続していく方針だ。